

道商工連通常総会表彰

道商工連の平成十七年度通常総会で表彰された優良商工会や優良役員などは次のとおり

(敬称略)

道商工連会長表彰

〈優良商工会〉

◇上川管内▽旭川北商工会

〈優良役員〉

◇石狩管内【北広島】▽会長・澤田博明▽理事・根岸道夫、森崎佳旺【浜益村】▽理事・青山和三

◇渡島管内【函館市亀田】▽理事・近江政斗【砂原】▽理事・岡田富雄、新谷春勝▽監事・清藤勇一【八雲】▽理事・高橋勝子

◇桧山管内【江差】▽理事・武藤利博【厚沢部】▽理事・溝口利幸、福島和雄【瀬棚町】▽理事・新栄正紀、佐藤節夫、鈴木静治

◇後志管内【留寿都】理事・五十嵐一裕【積丹町】▽副会長・播磨修一【仁木町】▽理事・土井憲幸

◇空知管内【栗沢町】▽理事・林義明、工藤修二、中田信広【南幌町】副会長・竹居田栄二【長沼町】▽理事・菅野ハツ子、清水彰、菊澤喜信【月形】▽副会長・亀倉勝幸【秩父別町】▽理事・藤村正彦、岡田存広

◇上川管内【旭川南】▽顧問・岡田佑一▽理事・松永盛将、稲田禎、小城勝治、大西敏彦▽監事・古里一朗【山部】▽理事・池田政臣【旭川北】▽理事・長谷川修【東神楽町】▽理事・西

山真【比布】▽理事・川原功【愛別】▽理事・佐藤保男、多羽田正義【上川町】▽理事・高張邦泰【上富良野町】▽副会長・北川昭雄【南富良野町】▽理事・加藤和男【風連町】▽理事・山崎清士【下川町】▽副会長・西村利幸▽理事・天近光子、横山大昭【中川町】▽会長・佐藤正▽監事・上野信男

◇留萌管内【増毛町】▽理事・山郷和彦【羽幌町】▽理事・田原昇一【幌延町】▽理事・高橋秀之

◇宗谷管内【猿払村】▽理事・梁田二郎【中頓別町】▽専務理事・宮崎安史▽理事・大場敬、工藤一夫▽監事・矢部優

◇網走管内【津別町】▽理事・濱端隆一、久保利治【端野町】▽理事・池田盛、真田治【置戸町】▽理事・小田重孝【興部町】▽理事・藤田貞次▽監事・津江政博▽元監事・佐藤健二【西興部村】▽理事・田村高志

◇胆振管内【白老町】▽会長・川田憲秀▽理事・仙田公昭

◇日高管内【様似町】▽理事・米田靖【えりも町】▽理事・川村一治

◇十勝管内【土幌町】▽理事・松岡繁治、黒坂政幸【上土幌町】▽会長・長屋光男▽副会長・佐藤正彦【新得町】▽理事・東修平、佐藤良一▽監事・石畑倉政【陸別町】▽副会長・山本周二

◇釧路管内【釧路町】▽理事・小路口智、鈴木不二男、残間順雄、須藤達也、村本敏矢、畠山和年▽元副会長・新歩春雄▽元理事・及川厚【浜中町】▽理事・種市重光、飯高尚志、島脇康夫、鈴木敏文▽監事・鈴木勝英【標茶

町】▽理事・小山内絹子【弟子屈町】▽理事・南但雄、近藤明【白糠町】▽理事・武田勝一【音別町】▽理事・前田信雄 (以上九十六人)

〈優良職員〉

◇桧山管内【大成町】▽事務局長・内糸和治▽経営指導員・大山慎也▽補助員・佐藤睦

◇後志管内【ニセコ町】▽経営指導員・佐藤浩二▽記帳指導職員・佐藤朱美【共和町】▽記帳専任職員・鈴木澄子

◇上川管内【旭川東】▽記帳専任職員・清住仁美【南富良野町】▽補助員・樋村裕之【剣淵】▽補助員・阿部雅紀

◇宗谷管内【枝幸町】▽補助員・日野里美▽記帳専任職員・橋元瞳

◇網走管内【置戸町】▽経営指導員・佐藤年光【生田原町】▽補助員・下郷紀美子【丸瀬布町】▽経営指導員・若林修【白滝村】▽経営指導員・鷺足和延

◇日高管内【門別町】▽経営指導員・菊池範孝、古川泰志

◇釧路管内【弟子屈町】▽記帳専任職員・鈴木真由美▽記帳指導職員・齊藤結子

◇道商工連【総務企画課】▽商工会指導員・渡部正樹【空知支所】▽専門経営指導員・中畑雅幸 (以上二十一人)

〈商工貯蓄共済加入推進優良商工会〉

◇留萌管内▽羽幌町商工会

商工会長セミナー開催

五月二十五日、道商工連通常総会に先だって「平成十七年度商工会長セミナー」が開かれ、札幌国際大学理事長の和野内崇弘氏が「北海道活性化への課題」と題して講演した。

和野内理事長は、北海道の活性化のためには特有の依存体質から脱却し、自立することが必要性を説き、「もつと上手に資源を活用すればもつと北海道は発展する。そして、おそらく観光を軸にした農業と流通が核になっていくだろう」と語り、「北海道の間人だから北海道に良くなつてもらいたい」と締めくくった。

只今、過分なご紹介を受けた和野内でございます。

ちょうど叙勲の話がございましたが、一昨日戴いて昨日帰って来たばかりでございます。

勲章を戴けるということでありますから有り難く一昨日戴いて、皇居で天皇の拝謁を受けました。褒章の時と2回目でございますけれども。

今日、声が掛かったのは、1月に商工会連合会の空知支所の婦人部と青年部の方を対象にして、お話をしたというご縁だと思います。このご縁が出来たのは、昨年1月15日に私は「北海道の宿題」という本も出したわけでありまして。この本が様々な話題を呼びました。この書籍は、卸し屋を通してないんです。私はこの出版社のやり方が、皆様方の参考になると思います。普通書籍というのは、作りますとちょうど生産物と同じに、卸しに持っていくわけですね。卸しで全国の書店に出すわけです。この本は直販なんです。つまり卸しを通さないほうが儲かるわけです。ただし、全国に「北海道の宿題」という本が売れるわけでもありませんから、北海道内に自分が知っている本屋さんに自分で送ったり、札幌市内は自分で持っていくんです。委託販売ですよ。

この本は北海道の出版社の本としては、売れたようであります。新聞でも、「なにわ書房」では1年間でベスト2の売れ行きだったようです。どうしてこの本が売れたのかなというふうに思いますが、私はそんな受けを狙って書いたわけではないです。自分が北海道に生まれて、今日まで北海道で生活をして、北海道のために発言してきたことをその本に載せているわけです。本音で言っています。本音といってもいろいろ差し障りがあるんですよ、やはり。ここにも差し障りのある方がおられると思うんですけれども。比較的差し障りはあまり気にしないで、特に個人名は出しませんから。名誉毀損で訴えられることもないでしょう。

この本がまた、東京でも地方出版社や小さな出版社のものを売っている専門のところか神田の神保町にあるらしいです。そこはプロの方が地方でどんな本が出ているのか、良い本はないかとか、結構そのところで売れて、地方で出した本のランキングに入ったと。それから全国的に知られたのは、たまたま、1月ですかね、朝日新聞の書評のところ、全国の本屋さんの売れ行きのランキングを出すところがある、そうしましたら、札幌の紀伊國屋書店のところ、7位だった。そういうことを機縁にして、小学校卒業以来会ったことがない人からも、名前が珍しいものですから、コンタクトがあって、手紙のやり取りをしたというようにいろいろなリアクションがありました。

これはなぜそういうことを申し上げたかということ、やはり今までは、生産者、卸し、小売り、消費者という流通の流れ、これをそのままやらずに、つまり狭い地域内の流通ではその手順を省いても良いのではないかということがヒントになると思います。これは儲けが大きくなければだめなんです。大手を通せば儲けは取られますよ、そこにね。それで

は生産者は一体どのぐらいに手元に残るのか。

私がずっと主張してきた北海道の課題というのは、依存から自立へということです。やはり依存なんです。我々の体質は。私は、教育、研究と経営と二束のわらじをずっと履き続けてきました。学長と理事長を兼ねるとか、一つのことでなかなか飯を食ったことがないです。足してちょうど良いぐらいの能力ではないかと思うんですけども、それは私はこれからの生き方として、なかなか一つのものだけでは生きられないという一つのヒントになるのではないかと。

依存から自立へというのは私の昔からの考え方です。地域開発の問題をやっておりましたが、この場合の地域を、北海道として設定をしているわけです。地域の問題を考えるということは、大体北海道を考えるということで、私はささやかな勉強を今まで続けてきたわけで、その中でなにを取り上げたら北海道は発展するのだろうか、昭和48、9年のことです。素直に北海道を勉強していて、その頃は苫東全盛期です。官も民も産業界も学界も挙げて苫小牧東部の工業開発をやれば北海道は一大飛躍するという時代でした。開発というのは、手段なんですね、それが目的化してしまったら駄目なんです。つまり、開発というのは、そこに住んでいる地域住民、北海道なら北海道の人間が豊かにならなければならない、これが地域開発の目的なんです。ところがどうもそれがどこかその事業をやること自体が目的化してしまっている。北海道の道民が豊かになるかどうかということです。

これは高度成長でどんどんと税収が上がった時には、北海道に多くの分け前がきたんですね、人口比率ではなくて。全国の公共投資の12%ですから。人口比率が4.6か4.7でしょう。それが12%もくるんですから、これは表面的に豊かですよ。しかし、底力はありませんよ。確かに食べることには困らなくなった、それでは新しい産業を興せたかという興せなかった。

そこで私は地域開発として北海道に何が一番合っているのだろうか、ということを考えました。もちろん第1次産業の地である、あるいは、石炭エネルギーの産出地である、これは分かりますよ、しかし、もっと大切に、我々があまり資本を掛けずに元手が掛かっていないものがある、それに私が目をつけたのが観光であったわけです。きれいな山、川、湖、誰が作ったか、誰が投資したか、これは天から与えられた恵みであります。これを活用していない、みんな無いものねだりでやっているわけです。これをうまく活用したら、こういう資源特性を活かしたならば、北海道は発展するに違いないと考えました。

ところがその当時の産、学、官はそんなものが産業として成立する筈がない。そこで稼ぐ金なんて大したことない、観光というと土産さんか宿屋さんぐらいだろうと、こんなものは小さいよというような考え方であったわけです。それで私は随分いろいろなものを書いたり、講演もしましたけれども、天然の現象で稼げるなんてそんなにないです。流氷は誰が作ったか、誰か作った人がいますか。それを金を払って見に来てくれる人がいる。当時私は網走やなんかでも、講演に行って、こんな流氷なんて邪魔になる、冬は魚が捕れない、ところが氷の下でプランクトンが繁殖するんですね、ですから流氷というのは邪魔な

ものばかりではなくて、非常に良い点もあるわけです。なんであんなもの見に来るんだろう。物好きにも程がある、少しおかしいんじゃないかと言うから、おかしい人からお金が取れない人はもっとおかしい人だ、というのが私の論法ですよ。あるものをどうして使わないのか、無いものねだりをやっているじゃないか。

苫小牧にトヨタでも日産でも組み立て工場が来たとしたら、それはものすごい経済効果ですよ。でも、そんな簡単なものじゃないですよ。関連企業を連れてこなければ自動車産業なんて成り立たないんですから。最低でも30以上の下請け工場が来なかったら成り立たないと思いますよ。今だってエンジンの組み立てぐらいでしょう。だから私は、それはもう北海道という地がそんなに大工業が成り立つ素質があるわけではない。つまり資本もなければ技術力がない、そういうところに土地と水だけあるから、工場を引っ張ってくれば北海道が発展するというのはおかしいと、それよりあるものを使って、しかもそれは元手の掛かっていない資源なんですね。これをもう少しうまく活用しようではないかというのが、私が観光開発に目をつけたことなんです。

北海道銀行の「経済の動き」という広報誌に、オイルショックちょっと後ですが、私は観光産業は北海道のリーディング・インダストリーになれるというふうに書いたんです。北海道を引っ張っていける産業になれるよと、ほとんどの人が信用していなかったと思います。観光産業は、今現在では消費額は農業を抜いて一番目の産業ですよ。農業が一番というのは大体皆さん方は分かっていますよね。けれども今や観光関連産業の消費額は農業の生産額を抜いているんです。

並み居る有名な研究者も、道庁なり開発局なりも挙げて、全部苫東、苫東という時代に批判をしていたのです。反対論者はいました。その反対論者は自然保護の立場の人です。自然保護派の学者などは環境が破壊されるというので、反対をしておりました。私は違う面から反対をしていたんですね。でも、当たっているでしょう。今、苫東はなにかになっていますか。今のペースであれを全部分譲するといったら百年は掛かりますよ。あんな細切れにしていたら。それが話は大きいかも知れませんが、そこに5000m級の大空港を作れというのが私の主張なんです。細切れでなかなか売れませんよ。

大体今の工場というのは、そんなに広い土地が要らない、人間も要らないんです。そんなに多くの水も使わないです。ですから19世紀から20世紀的な発想で考えていたんですね。それだけ北海道は残念ながら先進地域からみると遅れていますから、真似をしたがるのです。どこかで成功していると、うちでやっても成功するだろうと考えることが駄目なんです。だから依存から自立へですよ。人に頼らないで生きるにはどうしたら良いか。頼っているから今のような時には弱いんですよ。頼る相手がいないじゃないですか。以前から見たら半分ですよ、北海道に対して国が使う公共投資は。だから北海道は景気が悪いでしょう。今、財務局の調査でも、一番景気が悪いのは北海道ですよ。つまり国に依存していたからです。自分の力で興す産業がないから国に依存していた。つまり旦那さんが金持ちの時には金をくれましたから、これは景気が良かったのですが、日本国という旦那の懐が淋

しくなっているんですから、北海道に与える金が無くなってきているんですよ。だから慌てているわけでしょう。今その一つの救いが新幹線なんだと思うんです。一種の補助金的な役割だと思います。地域の開発という面からいろいろな問題がありますけれども、とにかく貧乏してでも自立の術を今我々が考えなければ北海道は沈没をしてしまうと思います。

その次に、これも自分がそんなに使っているわけではないけれども、北海道は頭を使っていない。この間、テレビを見ていたら、曾野綾子さんが乞食の話をしておりました。日本では乞食というのは認められないです。欧米なんかでもいますよね。いろいろなパフォーマンスをしていますよ、ただ、手を出しているだけではなくて。乞食も頭を使っているんです。人からただでお金を貰うというのになにか演技をしているんです。工夫しているんです。日本は幸い乞食という行為が法律で禁止されていますから、そういう人はいませんが、頭を使い、汗を流せ、そりゃまあ、自分達の仕事でみんな汗を流していると言うかも知れませんが、それはどちらかというとならサウナで汗を流しているのに近いんじゃないですか。サウナで流す汗は大した努力はいりませんよ。環境で暑いんですから、出てくるでしょう汗が。

動いて自分で体を動かして汗を出している汗の出し方を北海道の人はしていない。頭も使っていなければ、汗も流していないという識者もいますよ。そういうふうになると冗談じゃないという人がたくさんおられると思いますが、私は全体的な話をしているんです。だからお願いする相手は誰か、政治家に頼むわけです。もう少し道路をつけてください、橋を架けてください、どうしてくださいといって、政治家に依存する、政治家なんてうんうんと言っているけれども、本当に出来るかどうかだつて分かりませんよ。稚内の果てまで新幹線が行くっていつているんだから、でも、新幹線というのは人しか乗せないんですね。

大体北海道の鉄道は牛や馬やじゃがいもや玉葱を乗せるために国鉄が敷かれたんですからね、大体人間がいなかったのですから、開拓期には。そういうことを考えると、人しか乗せられない乗り物が稚内まで行くのは大変結構な話ですよ、どれだけの費用が掛かって、どれだけの効果があるか分かりませんが、そういうことではなく地道に自らの周りにある資源を使って、頭を使い、汗を流しましょうというのが私の考え方です。

基本的な北海道の開発というものに私は本当に恵まれた地域だったと思います。戦後特に昭和35年ぐらいですか、石炭が駄目になったあたりから、北海道にはこれといった産業がなくて、1次産業も次第に国の政策で、減反、米を作れ作れといっているながら北海道の米は作り過ぎだ、日本全体が余っているから作らなくてもよろしい、魚は魚でロシアとの関係で自由に捕れない、韓国の船は入ってくる、1次産業も閉塞状態にあるわけです。この壁を破っていかなければならない。

そして頭を使えということは、多少北海道の人の商売の仕方が粗っぽいと思うんです。私は良く言うんですけれども、大体が農業の方も農家の一戸一戸は別かも知れませんが

ども、大体が農家も協同組合を通したりしなければならぬということ、外側の規制よりも内的規制がきついのではないのでしょうか。

北海道は国土面積の22%あるけれども、農業でも考え方まで大雑把ではこれから生きていかれない。貨車1車とかトラック1台、2台の単位でものを考えていると思うんです。頭を使えという意味は、付加価値をつけることを知ることです。畑で取れたじゃがいもや玉葱をトラックなり貨車で運んだらこれは付加価値はゼロですよ。これを加工するなりなんなりすることによって、あるいは泥を落としてきれいな商品として売ればこれも付加価値に入るわけです。これは頭を使わないという意味で私は申し上げているわけです。

こういう努力は日本の全国的な地域の枠組みをみても足りないと思います。皆さん方は恵まれてきたというふうに認識してもらいたいと思います。盛んに今名古屋の経済が元気が良いと、名古屋は凄いなと、ところが名古屋の経済というのは、昨日、今日で出来たものではありませんよ。何十年、何百年かかってもものづくりにこだわって世界のトヨタを持ち、それに関連するような産業がすそ野の如く広がっているわけです。名古屋の人に言わせると、北海道が名古屋経済のようになるにはどうしたら良いのでしょうかという、もう無理ですねと言いますよ。すぐなろうなんて冗談じゃない、これまでどれだけものづくりに頭を使って、汗流してきたかということを知ってください。一朝一夕になったものではない、自分達の間からみると、北海道は恵まれ過ぎていて努力をしていないということと言われるわけです。

教育の世界でも同じで、私は毎年短期大学と大学の新生に話をするんですけども、私は自立ということを強調します。人に依存すれば弱い、どうしてもいやでも言う事をきかなければならぬことがたくさんあるよ、それは人に全く依存しないで人間は生きてはいけないけれども、出来るだけ人に頼らないで生きるようにしてくれと、親への依存、社会への依存、結局は甘ったれて育っているわけです。甘ったれて育って過保護なものは、過保護と気がつかないんです。北海道の人も国からの過保護できているということに気がつかないんですよ。当たり前だと思っていますから。それで来る予算が少なくなると、とんでもない話だということになるわけでしょう。それは政治家というのは厳しいことは言いませんよ。いやいや、任せておいてくれ、なんとかするからと、いや、君駄目だよという政治家は落ちるものだから、政治家が本当のことを言って皆さん方に厳しいことを要求する時は要求するとなったら日本の政治は良くなると思います。

もう社会の情勢を皆さん方ご覧になったら分かるでしょう、これは。経済的には厳しい時代です。60年位あとにはバブルが起きるかも知れませんね。でも今バブルで大変だったということを知っている人は、その頃はいないんです。経済は循環しますから、また、そういう事態が起きると思います。不動産ブームだって起こると思います。でも、ここ少なくとも半世紀は、かつてのような事は起こらないだろうということを考えれば、北海道の人間は新しい価値を生んでいかなければ駄目だと思います。今までの歩みでは駄目だというのが私の考え方であり、その証拠に、北海道に今まで莫大な開発投資がなされたん

ですよ。道路も良くなりましたね、港湾も良くなりましたね、農地開発もなされましたね、これだけ莫大な国費を投入したのに、これだという新しい産業が生まれたのでしょうかというのが私の疑問なんです。生まれてないでしょう。北海道を引っ張っていくような、あるいは工業というのが新しく生まれていないです。

私は若いときから割合に共同研究という、専門が多少異なった人達と結びついて、共同研究をするのが非常に多かったし、私はそのほうが好きだったんですね。一人の人間の考え方というのは限界があるんです。私は組み合わせが価値を生むという論者です。AとBという違ったものがなんとかここに接着剤を見出して一緒になれば、Cという新しい価値を生む。これを考えなければならぬ。それが1次産業、2次産業、3次産業、これの融合というか、その媒介をするのに相応しいのが観光だと思っています。

皆さん方、観光の仕事に従事しておられる方がどの程度いるか知りませんが、これからの北海道は確実に観光が媒介の役をして1、2、3次産業を繋いでいかなければ魅力あるような産業に育たないんです。いろいろなものを組み合わせてはじめて観光行動が成り立ち、また、満足がなされるわけです。この手法を1次産業、2次産業、3次産業の方に考えてもらいたいという問題提起をして皆さん方に是非その実践をお願いしたい。

これまでは1、2、3次と別々に分かれてもなんとかやっていけた、北海道は2次産業といっても、どちらかという建設業が入りますから、よその地域の製造業とまた、ちょっと性格が違います。ところが今建設業は農業のほうに入っていく、ただし、いろいろな制約がありますよ、土地の使用の問題など、こういうくだらない規制を取っ払わなければいけない。

今私達の世界も規制緩和で大変なんです。株式会社立で大学が出来るようになりました。今までは国立か公立か学校法人立です。私共も学校法人ですけれども、これでしか学校は出来なかった。今は株式会社で大学院も大学も中学校も高校も出来るんです。ここまで規制緩和されてきています。札幌にもアスティ45に、リーガルマインドという株式会社立の大学があると思いますが、もともと学校法人立で学校を作るのには土地が要る、建物が要る、そして定員に応じた先生が要る、今は土地も要らない、借りてもよろしい、建物も借りてよろしいというような規制緩和の時代です。ですから、例えば、都市の人間でサラリーマンをやって、北海道へ来て農業をやりたいとかという人も結構いるんですけれども、規制が邪魔をして、なかなかできない。特に1次産業のところは、規制は強いかも知れませんが。

この頃、建設業の企業が農業の会社をやる、これは向いていると思いますよ。例えば、土木などは土を相手にしている、農業だって土を相手にしているんですから。掘るところまで同じようなものじゃないですか。そういうような土というものに対して、どちらも親しむという共通点はあると思うんです。これをうまく転換していった魅力ある農業を作っていくといえますか、これはこれから日本の大きな課題だと思います。

北海道のように比較的農家一軒当りの耕地面積も広いとか、いろいろなものに挑戦の可

能性があるわけです。私はこれから北海道というのは、そんなに大工業で成り立っていくとは思いません。そりゃ土地はありますよ、水もありますよ、けれども、もう人件費の問題からいっても、中国に出かけていく、あるいは、東南アジアに工場を作るというのは当り前になっているわけです。これを日本の産業の空洞化といっているわけですね。工場がみんな外国に逃げていく。自動車生産のかなりの部分がアメリカや中国でやられている。そうしますと、北海道にそういった大工業が立地するという可能性、採算面でも合いません。北海道の人の労働賃金が全国比でそんなに低いかというとそうはいかないでしょう。最低賃金法が全国共通にありますから。

私は大工業は北海道では将来とも無理だ、中には苫東に飛行機の組み立てをやったらどうだということがある、そりゃ土地はありますけれども、航空機産業というのは現代科学の粋を尽くしているんですよ。どこに北海道にそんな技術者がいますか。どこにそんな資本がありますか。土地だけあっても駄目、例えば、ボーイングのようなシアトルにある工場を苫東に移すなんていったって、簡単に建物を作ればいいわけではない、航空機産業を背負う技術の基盤がないんです。だから最先端の産業の技術の基盤が北海道にないんだから、将来出来るかも分からない、でも50年後ぐらいは。無いものねだりしても駄目、でもそういう構想としては面白いですよ。航空機会社の組み立て工場を作る、それは面白いし、付加価値も高いし、でも私が主張する5000m級の滑走路を作るというほうが技術力は関係ないから、作ろうと思ったらすぐ作れますよ、苫東に。

千歳でも500m延ばすとか、延ばさないとか、まだ解決しないでしょう。苫小牧地区に第二ターミナルのなんだかを作るという約束したのがどうのこうの、そういうご機嫌取りばかりやっているからね。だから今だに解決していないでしょう。500mの滑走路延長だつてこの広い北海道といえどもなかなか出来ない、丘珠で100m延ばすといつたつてごちゃごちゃしてなかなか出来なかったでしょう。今、世界的な国際空港は4000m級が主流ですから。成田空港は欠陥空港ですよ。2本目の2500mでは使い物にならない、中型機ぐらいしか飛ばない、でも50m延ばす、150m延ばすといつても延ばせないでしょう。今度800人乗りのジェット機、総二階建ての開発されましたね、800人乗りですよ、大型ですよ、大型ですから、大型になればなるほど滑走路は長くなければ駄目です。本当の飛行機の理想はヘリコプターのように垂直に上がるのが一番良いですよ。ただし、800人も乗るような飛行機がこのまま上に上がったら大革命ですよ。一番良いのは滑走路がない飛行場が良いわけでしょう。

これからの北海道の発展のためにやることは何かといえば、恐らく観光を軸とした農業と流通というものがその核になっていくだろう。知事も農業と観光が北海道のこれからの主流の産業だと言っていますが、大体こんなことを30年か40年先に言っていれば北海道は変わっていたでしょう。ただ、観光立県宣言を平成2年にやって、その後どれほど進んだかということにも進まなかったでしょう。宣言だけなら誰でも出来るんですよ。問題はその宣言をしたら、どういう努力をするかということです。観光と農をつけたらどういう付



加価値を生むかということを示さなければいけない。部長級の参事監を置いたって、それだけで北海道が発展するわけではありませんよ。大切なのは何をやるかなんです。

そして私の考えは観光というのは、観光に関係するところだけに波及効果があるのではなくて、これがかつて私は第4次産業という名前をつけたほどです。1, 2, 3次を統合して経済効果をもたらしていく産業は観光だと。このところ外国人の観光客が減ったり、国内の観光客が減っていますね。これはやり方が悪いんですよ。つまり昔のように競争相手がないというようなことを前提にしてノホホンとやっているから。今は国内競争の時代ではないんです。近い外国との競争なんです。今、台湾からも香港からも来ている、韓国からも来ている、中国はちょっと途絶えている。つまり今まで日本は近い外国の人たちを迎え入れるような受け入れ態勢を作ってこなかったわけです。ホテルへ行っても言葉が通じないとか、いろいろな表示も駄目だ。九州は随分前からハングルで表示をしていました。

札幌なんかもようやく手をつけそうですが、そんなことは大分以前から言ってきたのですが。つまり競争環境が整っていない。だから最近韓国からも来てはいますが、逆に40代、50代の女性が随分韓国へ行くでしょう。失われたる日本男性の魅力を韓国へ行って求めているという、どんどんと日本の金は韓国へ流れていますよ。韓国では竹島問題で日本を攻撃していますが、したたかに観光では儲けているんですよ。韓流美男ブームによって女性観光客が押しかけ、食事をする。垢すりだかなんだか、エステでしょう、お金を韓国で使っているのです。観光地へ行くこの女性たちが使うお金をなんとか北海道なりで消費させなければいけないんですよ。意外と男性は自由になる金がないんです。女性がどれだけ持っているか男性は分からないんですよ。そういう女性向けに北海道の魅力を増す、一つは食べ物です。でも、北海道といたら、カニ、カニ、カニ、いい加減にして観光客は言っていますよ。宿泊の連携がありませんから、今日もカニ、明日もカニ、こういう芸のないことをやっていたら、北海道観光は、駄目になると思います。

韓国の人は非常に温泉好きであります。今から10年以上前でしょうか、私は観光の問題で韓国を訪れて、韓国の旅行代理店とか大韓航空とかを団長で回ったんですけども、北海道には温泉がたくさんあるということを意外と知らなかった。雪まつりは知っているけれども、ホテルが満杯で駄目だということは知っていました。私は言ったんです。小樽でも支笏湖でも私の家から、札幌市内ですけれども、雪まつりの期間で、会場に行くよりも小樽からのほうが早いと思いますよ。こういう情報の提供というのが北海道は非常に苦手なんです。きめが粗過ぎる。ですから観光を軸にして、中小工業を育てようとか。例えば食品加工など、観光が盛んになれば関連小工業も発展すると思います。

本州の中小企業というのは、どういう役割かという、大企業があるわけですね。これの下請け的な役割を果たしているのが多いです。ところが北海道には大工業がありませんから、下請け的な役割が中小工業の人達にないんですね。自立的でなければ駄目です。北海道の工業というのは。自分で作ったものを自分で売らなければ駄目なんです。そうする

と、作ることは作る、今度は作るほうと売るほうがバラバラじゃないですか。商工会というのは、商と工とを書いてあるから、本当は農商工会ぐらいに改めたほうが良いですね。農業関係については昔から言っていますが、本当に一農業者が農協とかホクレンによって幸せになったろうか、という疑問を私は持っています。

必要のない機械とかなにかを買って借金払いに大変になっていたのではないか。これは全然当てずっぽうで言っているわけではありませんよ、私だって。多少は研究もやっていますから、また地域開発の診断も頼まれていろいろなところに実際に行ってみたり、「北海道の宿題」という本の中に書いていますけれども、この村でご馳走になるのが気の毒だなという気持ちになったこともあります。実際見に行ってもですね。本当に農業者が幸せになっているのだろうか。という疑問をいつも私は持ちました。

金持ちになっている人もいます。そういう人は都市の近郊農家です。都市の近郊ですから地価が高いですから、売れば凄いものです。農地の免税程度の問題じゃないですよ。でも、最近は売らないで建物とか倉庫とかを建てて貸していますよ。不動産業です。けれども農業で食べている人が本当に笑うような生活の程度になったろうかというのが、私の疑問なんです。

大体北海道は大笑いしていない。建設業の人だって大笑いしていないと思います。かつて私もそういうことを調べている時に、公共の大きなプロジェクトで仕事が出る、出た途端に4分の1は東京に流れていくということは実際の話です。北海道から調達出来るものがあるでしょうか。鉄材でもセメントでも、北海道に工場があってもそれが売上げ、利益とも道外に流れていくでしょう。北海道には見せかけの金は落ちるんです。北海道開発費がなんぼだといって、ところが多くの金は全部道外に流れていく。これは北海道の産業が自立的でないからです。せめてそれを循環させようというのが私の考え方です。循環できないだろうか。それには異業種の人達が手を繋ぐしかない。

私は宿泊業のことでも言っていたのですが、最近は中小の時代になってきた。もう大では飽き飽きしている。それを言うと大のほうの人の批判になるからあまり言えないけれども、家族単位や個人単位で動く時に、エスカレーターに乗せられて、体育館のような食堂に行って、晩ご飯を食べて満足が出来るという時代は終わった。むしろパパ・ママでやっているような小さい旅館で、きめ細かい自分のところで作ったものを出してもてなすというようなことがだんだんと求められてきている。

つまり、中小の時代だと思う。大では出来ないですね。大と同じことをしようとするから中小は負けるんです。北海道でもいくつかそういうところが出てきましたね。ロコミで泊まる、結構繁盛している。大のところではテレビで宣伝したりしてやらなければ客は集まらないでしょう。これは、もうここ10数年以上前から言ってきて、ようやくそういう傾向になってきた。

大宿泊施設の特徴は低料金で大量に集める。そうすれば食べるものも何百人いればみんな同じ、美味しいかどうか、私はあまりそういうところに泊まったことがありませんから。

かつては泊まったことがありますから、大体分かります。そうすると、大手の旅行会社に依存しなければならない、さっき卸しをカットして自分で委託販売して自分で開拓したところに置いてもらって、といえ取次ぎ料、卸しの代金が掛からないでしょう。小売り屋さんにもマージンを、卸しを通すより上げられる、自分も頂ける、この方式なんです。大手旅行会社に頼むと大体15%から20%は手数料で取られますから。力のないところ、つまり大手の旅行会社に依存しなければならないところは大変です。ではどこにそのしわ寄せがいつているかという、これは宿泊客にいつている、これは当たり前でしょう。

私はここでだけ言っているのではありませんよ。もう10数年前に北海道新聞の一面扱いの大型対談、「潮流」というのがありました。そこで当時まだJTBと言っていまんでしたが、日本交通公社の石田さんという社長、生え抜きの社長です。対談で、その方が唯一嫌な顔をされたことがありました。

私は地元で一生懸命エージェント依存から抜け出ようということを言っている。エージェントに依存していると駄目だと、生かさぬように、殺さぬようにという江戸時代の農民政策と同じだ。その時嫌な顔しましたね、なぜかという、旅行会社はそのエージェントから取る手数料で食べているわけですから。それは嫌な顔しますよ。でも、考えてみたら皆さん方から離れようというところは、それなりの良いサービスをして、お客から歓迎される場所ではありませんか。むしろそういうところをエージェントはお客にしたいのではありませんか、ということをお願いした。サービスは良いし、そういう所を得意先にしたら良い。手数料で大体どのぐらい評価されているかは、旅館、ホテルでも分かるんです。

冬場あたり、5000円から7000円ぐらいで都市ホテルに泊まっていたらどれだけ自分のところに入りますか。現金が動いていけば良いというだけの商売でしょう。こんな商売をしていたら北海道は発展する筈がないんですよ。ですから中小は手を組めと言っている。今まだ孤立しているんですよ。ですから、そういう仕掛け人に一生懸命に言っているんです。会を作りなさいと。例えば、自分のところは満員だと、残念ですが、また次回にしてくださいと言うんですよ。それじゃ駄目なんです。私共は残念ながら今日は満員ですが、この近くであそこだと信頼がおけるから、そこで良かったらご紹介しますと、お互いがやれば良いんです。自分のところだって、どこかからそういうように紹介されて泊まるかも知れない。中小は手を繋がないと駄目だ。中小の宿泊業の会を作ったらどうかということを私は一生懸命に推奨しているわけです。

ただ安いだけで泊まるというのは日本人は飽き飽きしているんです。きめ細かいサービスといいますか、素朴な食べ物でも良いんですよ。そういうことを実現していくというのは、いろいろな商売に通用すると思っています。自分で顧客を開拓するんですから、開拓したお客は離さないように大事にするんですよ。どこかから廻されてきたから、2回、3回と絶対に来ないだろうということを前提にしてやっているんです。エージェントと大ホテルの関係というのは。二度と来ない、今日だけ適当であれば良いと、これは商売ではないです。

これは農業だってそうだと思います。高齢化していけば、そんなに量は食べないんですから。今のキャッチフレーズの安全・安心でしょう。世の中必ずしも安全・安心になっていかない。食べ物も安全・安心ができなくなった世の中です。だから自分の食べるものは絶対に安全・安心だと。外国で農薬をどんどん使って生産量を高めて安く売るといいう売り方もあるでしょう。そういう人はそれで良いんです。体内に農薬の残留度が高くても、安ければそれでも満足だと。高齢化社会というのは、量は食べないんだから、質もの良いものを少量でも良いから、いくつになってもまだ生きたいと人間は思うものですよ。ここに食べ物に信頼感がだんだんなくなってきている。これに対して信頼感を取り戻すのはこれからの農業だと思います。

それを私は顔の見える農業、つまり、どこどこの誰々が作りました。そういうような農業の方向にいく、それに対応した流通をさせることが必要です。しかし、大きなスーパーマーケットでは無理だと思います。一方ではとにかく安ければ良いという若い人で元気が良くて多少危険なものが入っても大したことはない、すぐに排泄するという体力のある、循環力のある人は良い。しかし、だんだん年齢になると食べ物が気になっていく。

地産地消ともこの頃言われます。その土地で取れたものをその土地で消費する、その仲立ちは商業者の仕事です。なかなか農業者は生産も販売も出来ませんよ。そういうものは高くても良いんです。私は薄利多売ということに対して、厚利小売、利益を厚く、少なく売る、多く買ってもらえばなお良いですけども。そういう商売に転換しなければ中小は大とは対抗できません。価格では。品質で信頼感を買ってもらおうという商売の方向に転換しなければ駄目です。それが今までは大手スーパーと同じ商売でやってきたから、中小は潰れる。中小が生きていくためには、違った商売の仕方をしなければいけない、というふうに私は思います。

つまり北海道というのは、作ることはした、農業でもどんどん生産した。ところが売ることを知らない。商品生産ではないです。商品というのは、作っただけでは商品にならないです。自分の家の周りの畑で作ったのは商品ではありませんよ。単なる産品ですよ。つまり商品というのは、売ることを目的として作られるものを商品というのです。このようにつくり方は下手です。

一村一品で残っているのがありますか。横路知事の時代のことです。その時の模倣の対象は大分県の平松知事ですよ。平松知事は補助金を与えなかった。自分の力でやってくれ、一つの町が自分の自慢の商品を作ってくれ、そして売rinaさい、北海道は補助金を与えて作って、作るどころまではいきました。でも売ることを知らないでしょう。一村一品で今残っているのがありますか。ないでしょう。残ったのは、ふるさと創生で掘った公共温泉、いまや温泉ではなくて、なんだか地下水を沸かしているでしょう。こういう調子だから、本物志向の時代に入った時に、偽物はやはり偽物でしかないです。北海道の人が頭を使えというのは、私は商品、つまり売ることを前提にしてもものを作るように考えなさい、それには人並みのことでは出来ませんから、頭を使い、汗を流さなければできません。苦労し

ますよ。

今でこそ観光という問題が当り前のように取り上げられるようになりました。私が最初取り上げた時には、なんで大学の先生が観光というのかと言われました。でも今では北海道を支える第1の産業になっているじゃないですか。古い人は、あなたの言った通りになったねと言う人もいます。

当時、私が観光の問題に発言しはじめた頃、新聞も観光というとゴールデンウイークの人出というレベルですよ。観光というと大体ゴールデンウイークにどれだけ人が出たかという社会面のネタです。経済の問題としてはほとんど出ません。私が一生懸命に北海道新聞の政経部、今は政治部と経済部は分かれていますけれども。政経部ネタにしてほしい。経済の問題に観光がならなかったら、絶対に観光というのは北海道では普及しませんよというので、ようやくそれからしばらく経ってから経済部のネタになってきた。それから経済効果がどれだけあるかというような調査もやるようになった。これも諦めていたらそうはなっていない。今は黙っていてもなるかも知れませんが。そういう努力というのは他の商品づくりと同じだと思います、研究も。はじめから世の中に認められる研究なんてそんなにあるものじゃない。どれだけの説得力を持つかということなんです。どれだけ人を説き伏せられるか、だから今でもまだそうですけれども、農業とか漁業の人が、あなた方が一番観光産業に近いんだよと言っても、そんなもの小さいホテルに玉葱だの持って行ったって大した金じゃないと、ところがホテルはそれを加工して高いお金で食事を提供できるでしょう。そういう循環のことを考える。

かつて昭和40年代の後半ですけれども、私は観光産業の担い手は誰かと言った時に、銀行だと言ったことがあります。当時銀行というのは、観光とつく産業、ホテルとかに金を貸しませんでした。政府関係の北東公庫とかしか貸しませんでした。銀行が観光の担い手といった。その理由は何かと言ったら、これからの世の中はカード時代に、つまりキャッシュレス時代になるよ、外国旅行に行ったり、日本国内に行って現金を持ち歩くのは無用心だから、カード一枚で旅行が出来る時代に必ずなりますよということを言った。だからその担い手は銀行だと、銀行は観光のお蔭で結構儲かるようなことを言ったら、銀行の人はポカンとしておりました。大体観光とつくものには金を貸さないんだから。そういう時代もありました。

なかなか先を見るということは出来ませんが、考えていけば必ずそこに活路が開ける。商品づくりをしているんだという意識が大切なのです。建設業で建物を建てる、これは商品づくりをしている。全然観光と関係がないわけじゃないでしょう。旅館を作る、ホテルを作る、これは建設業がなかったら出来ないんですよ。観光が栄えれば、建設業も栄えるわけです。建設業も道路だとか橋だとかそういうものだけじゃないんです。

北海道の観光がもっともっと全道的に発展していけば、建設業もその余波を受けて恩恵を受ける。つまり、今まで1, 2, 3次と切り離していた。1次産業と3次産業とどこが関係あるんだと、直接スーパーにもの売っているわけではないしと、こういう関係です

よ。食品加工だってそうです。これの良い例は、私はトマムの開発にかなり早くから関わっていたことがあります。私はあそこにリゾートの夢を見ていたわけです。残念ながら途中でちょっと変わりましたが。

あそこは山菜の宝庫です。辞めた前の前の村長さんが、産業課長の時に、山菜の処理工場を作ったんですね。そして、後に立派な物産館を作ったんですけれども、ビニールの袋に入れて、販売の台もなく、地べたで子供を背負ったようなおばさんが売っていた。これでは駄目だ、そしてトマムに近代的なホテルが出来た時にお土産として山菜の瓶詰めが売られた、これはもの凄く付加価値が高いですよ。量的にみて、大した量が入っていないんですから。そうするとそれが土産品になるんです。ビニールの袋に入ったものを人に上げられませんよ。瓶詰めになれば立派な占冠の山菜の瓶詰めとして売れるわけで、つまりこれが商品生産なのです。考えればいくらでもそのような例があると思います。

今まで全く関係がないというような仕事の人と付き合う。私は自分の人間関係もそうなんですけど、意外と同業者とそんなに付き合いはない。大体同業者と付き合っても付加価値が生まれない。考えていることが分かりますから。特に自分の職場の人間と酒を飲んでもなんの付加価値も生まないでしょう。考え方が分かっていますから。よその世界の人と付き合えば、なるほどなというヒントが得られるんですよ。だからこれからは、異業種だと思われるものが意外と自分にとって非常なプラスになる。できれば同業者組合で話すのではなくて、それも良いですけども、同業者ってみんな競争相手ですよ。表面的にはニコリ笑って仲良くやっているかも知れませんが、腹のうちは俺のほうに仕事を、となるでしょう。ヒントは異業種にある。

私等の商売は意外と同業者が集まるということがありませんから楽です。新聞社とか経済界の方とかいろいろな方と接触をすることによって、自分の仕事にもヒントが得られたと思っています。ですから先ほど申し上げたように、組み合わせは新しい価値を生む、組み合わせなければ駄目です。単体で売ろうとしても駄目。人と手を組むことによって新しいものが出てくる。

今の時代は大企業なんかもそうですね、なぜこれとこれとが一緒になってどういう価値を生むのだろうかというのがたくさんあると思います。そして北海道の場合には観光産業を軸として、産業のすそ野を広げていく、非常に経済的な波及効果は観光は大きいんですけどもね、残念ながら工業とか農業とか、もう少し企業があれば、もう少し大きい北海道のものを北海道で消費していくことは出来るんです。多くは道外から仕入れていますから、ですから消費額の割合に生産波及効果が小さいんです。それはこれから皆さん方の責任だと思うんです。

出来るだけホテルや旅館も地元のを仕入れて、旅行者に提供するように仕向けていただければ北海道はもっと豊かになっていく。当面はこれしかない。観光振興は目的ではありません。けれども、経済力をつけていかなければ駄目です。適度に豊かで適度に食うに困らない。そんな北海道では駄目です。もっと発展しなければ。

この間、大鵬親方も言っていましたね、十両以上の相撲取りがいない、辛抱が出来ない、北海道では昔は貧乏だから、一つこれで一旗挙げてやれと思って一生懸命にやったけれども、今は過度に国の補助やなんかで、子供も一生懸命に頑張っただけから金持ちになるぞというような気概がない。これが北海道の姿を物語っていますよ。十両、幕内がいない、横綱、大関、関脇、小結はもちろんいません。頑張る者がいない、適度に保護されてきた人間は弱いんです。依存してきた人間は弱い。だから北海道は将来もう少し貧乏するかも知れないけれども、いつの日か国に頼らないで、生きていけるぞというような気概を示して頂きたい。これは皆さん方の地域、地域での頑張りにあるのではないかと思います。

最後になりますけれども、先ほどから申し上げているように、同じ業種はもちろん今でも結びついてきたでしょう。これからは異業種が結びついていくしかない。そして買ってくれる消費者が何を求めているかということに敏感でなければいけない。何を求めているか。値段は高くても、安全・安心な野菜を求めているのかどうか、なんでもいいからうんと安いものを求めているのか、そこの見極めが大切です。大スーパーと同じ商売をやったら絶対に負けると思います。経済というのは循環ですから、結びつくことによって循環していけば、必ずやそこに付加価値がついて発展がある。自分達だけで、同じ者だけで手を組んでいたよりは発展をしていこうと思います。それがいわゆる経済の活性化ということです。今までにない動きが出来る、違った商売の人と付き合うことによって、何かが変わってくるという、これが北海道はちょっと足りないのではないかと。経済というのは循環なので。ひと所に止まらない。だから波及させるわけです。ちょうど石を投げて波紋が広がっていくようなものです。そういう活動が皆さん方のような地域の商工会の役割ではないかと思います。

私は実際に実務でそういうことをやっているわけではありませんが、私も昭和51年から学校ですけれども、経営をやってきました。経営が大変厳しいということ。今、子供がいなくなったところで、我々の業界も大変厳しいんです。ですから、私は空理空論ではなくて、自分の実践、これで約30年近い経営者稼業と教員との兼業でやってきました。日本の農業を象徴している兼業農家と同じです。一つでは食えないから経営者もやり、教育、研究もやって食ってきた見本ですから。まだまだ皆さん方は頑張って北海道の経済を發展させてください。希望を失ったら終わりです。私はまだこう言って、あちこちで叫んで歩いているというのは、北海道に希望を捨てていないからです。その代り言うことは厳しいです。あなた北海道の人ではないんじゃないのという人がいます。北海道の人間だから北海道が良くなってもらいたいから、僕は厳しいんだとっています。

どうもご静聴ありがとうございました。